



誌上 進路指導ケーススタディ この生徒とどう向き合う?

長期休暇明けは、様子の気になる生徒が出てくることもあるのではないのでしょうか。このコーナーでは、日常ありがちなケースを取り上げ、実際に先生方に回答していただきました。さらに、日頃生徒の悩みと向き合うスクールカウンセラーの方や、長年高校現場で活躍され現在は会津大学で教育学や教育カウンセリング心理学を研究されている荻間澤勇人先生にも、ケース対応の極意を伺いました。校内研修などにも、ぜひお役立てください。

取材・文 / 清水由佳 イラスト / おおさわゆう

ケーススタディ 学校を辞めたいと言い出した生徒のケース

1年生。夏休み明け、休みがちになっている生徒が気になったので、声をかけ面談を実施。

<やりとり>

教師：最近、少し休みが続いたようだけど、どうした？

生徒：ん～、別に。

教師：どこか具合でも悪いんじゃないかと心配したんだけど。

生徒：あ、いや、なんかダルいっていうか・・・。

教師：そっかー、ダルい感じね。

生徒：ん～、学校来ても面白くないっていうか、そう“つままない”、いろいろ面倒くて・・・。

教師：夏休み明けは、確かにちょっときついよね。

生徒：勉強わかんないし～、(学校に)来るの疲れるし～、かったるい。

もう学校辞めようかなあ～って。

教師：え～、学校辞める？

↓ この後、どのような対応をしますか？(しましたか?)

● どう対応するか

● 上記の対応をする理由は？

教育カウンセリング心理学の専門家の視点から、ケース対応の極意をアドバイスしていただきました。

軽く受け取らずに どんな思いか丁寧に聞く



会津大学 文化研究センター
上級准教授
荻間澤 勇人 先生

かりまざわ・はやと●1986年岩手大学工学部卒業後、岩手県公立高校教諭に。早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程単位修得退学。教育学、教育カウンセリング心理学を専門とする。2015年4月より現職。

もう一度、中学から高校への 進路指導のやり直しを意識する

1年生の夏休み明けに、学校を辞めたいと言いつつ生徒は少なくありません。夏休みに違う価値観に触れたり、学校よりも魅力的なことに会ったりして、何かモヤモヤしたものを抱えることも増えます。そこで経験豊富な先生ほど、「よくあること」と軽く捉え、「そんなこと言わずがんばれ」と励ましてしまいがちです。しかし、それは逆効果です。

まずは、「辞めたい」という気持ちをしっかりと受け止め、「進路のことを考える時期に来たんだね」と、状況を認めることが大切です。そして、「大事なことから焦らないで、まずはどんな思いでいるのかを教えてください」と、しっかりと時間をかけて対応していく姿勢を示すことです。さらに、生徒との面談を繰り返し、ある程度落ち着いたらところで、保護者との三者面談などを行う必要があるでしょう。いずれにしても、「学校を辞めてはダメだ」と、頭ごなしに教師が決め付けることは一番やってはいけないことです。

学校によっては夏休みのアルバイトを禁止しているため、アルバイトで価値観が揺らいでいる生徒が話しづらくなっていることもあります。



私なら

こうする！

こうした！

実際に、読者の先生方がどうされたか・どうされようとするかをお伺いしました。

生徒の訴えにひたすら耳を 澄まし「話を聞く」

(北海道・道立 北見柏陽高校 中川了之先生)



長期休業後に登校を渋る生徒が出てくるのは、長年の教員生活のなかでもよくあることの一つです。高校・中学・小学校で30年以上教員を経験していますが、どこでも同じ傾向がありました。ただし、高校、特に今回の事例のような1年生の場合は、そもそも「高校に進学した」時点で本人が抱えていた問題、とりわけ「進路」に関しての思いが大きな要因となっている傾向があります。しかも、「学校を辞める」という選択肢が一番早い解決策のように思えるのも、本人の問題解決能力の低さからはやむを得ないところでしょう。

私としては、生徒との人間関係がどのようなものであるかによって多少対応は変わりますが、基本は、生徒の訴えにひたすら耳を澄まし、聞いてあげることが第一としています。

4月から8月まで本人が考えてきたこと、思ってきたこと、感じてきたこと、それらをすべて吐き出させる。それが最初のステップです。「だるい」「つまらない」「面倒くさい」「勉強わかない」「疲れる」など、表層的な言葉の「根源」を本人と共に探してあげることが大切です。時間はかかります。かつては一人の生徒と

日頃の信頼関係の 構築が大事

(東京都・都立 練馬高校 正木成昭先生)



まるまる6時間近く話をした(聞いた)経験もあります。簡単にアドバイスを与えたくなるのが教員の立場ですが、そこをぐっとこらえて、本人の思いを解放させてあげるのが、その後につながる大きな鍵だと思います。最終的に進路変更となった生徒もいます。しかし、最初の「関わり」は、彼・彼女らにも、少しは残っているようで、その後も年賀状のやりとりなどにつながっています。

以前、信頼関係がまだそれほどできていなかった生徒から突然「学校を辞めたい」と言われ、面談で理由を聞いて学校を続けるように説得をした経験があります。担任だったので納得してもらえたかと思いましたが、こちらの勘違い。余計火に油を注ぐ状態となり、結果、進路変更をしてしまったことがありました。この経験が今に生きていて、早い段階で二者面談をしたり、日頃の声かけなどで信頼関係を構築し、このような事態に備えて情報をキャッチしておくことが重要だと思います。

また、「辞めたい」と言われた際も、すぐに面談をして傾聴を心がけます。そうすると、

スクールカウンセラーの視点

このようなケースで、スクールカウンセラーならどう対応されるのか。先生たちとの協力のあり方なども伺いました。



ガイダンスカウンセラー
木村佳穂さん

2005年、岩手大学大学院教育学研究科修了後、青森県と栃木県で6年ずつスクールカウンセラーとして勤務。2017年3月まで、早稲田大学教育・総合科学学術院で非常勤講師も務める。

再度、1学期中の学校生活を振り返り 将来展望を再構築してみる

進路変更は、必ずしも悪いことばかりではありません。メリット・デメリットをわかったうえで選択肢としてはありうるものです。ただ、そのためにはそれなりの準備が必要になります。まずは本人の感情を否定せず、寄り添いながら話を聞いていくことが大事だと思います。学校を辞めたいという気持ちがありながらも学校に来ているという事実を認めてあげたいと思います。

1年生のこの時期に言い出すケースとしては、不本意入学の生徒の場合があります。1学期中に、高校生活の目標を見出せなかったのかもしれませんが。そこで、生徒なりの目標の再構築を、担任の先生と一緒に支援していくことが多いです。1学期に良かったところ、がんばったところを先生からフィードバックしてもらい、将来展望や仕事調べなどをしながら目標設定していけるといいと思います。

そんな時は、教師の役割を一旦脇に置いて「教師としてではなく、一人として話してみよう」と対応してみてください。

話すなかで、どうしても進路を変更したいということであれば、どうやってうまく変更していけるか援助する姿勢も大事です。どんな方向があるのか、資料やフローチャートなどで示しながら考えていくと、お互い冷静にもなれて効果的です(※)。中学時代に行うような進路指導をやり直しする感じですね。現実的になってみると「やっぱり学校に残る」という選択肢に戻ることも結構ありますし。万一、進路変更したとしても、「自分の将来や社会適応にとって価値のある時間を高校で得られた」と、学校への良い思い出につながるのではないのでしょうか。

(※)「キャリアガイダンス誌のバックナンバー(2012.12 No.44)P.34のチャートが大いに役立ちました」と河間澤先生。

家族との関係やクラスの友人関係、地元での関わり、本人の気持ちなど、きっかけや経緯がよくわかってきます。それによって本心から言っているのか、そうでないのかもわかってくる場合もあります。もし本気で考えていても、一緒に目標を立てその目標を応援してあげたり、認めたり褒めたりすると、変わってくる場合もあります。

家族への連絡を入れる場合には、それを嫌がるケースもあるため、「今後〇日間欠席までは家庭連絡はいれないけど、超えた場合には家庭に連絡するよ」など、柔軟な対応をすることで登校しだすケースもあります。

そういった話を深めるためにも、日頃からの信頼関係構築が大事だと思います。授業の空き時間にクラスでの様子をたまに見に行ったり、休み時間に声をかけるだけでも違います。生徒は、「見てくれてるんだ!」とか、「話を聞いてくれる!」という気持ちになると、「辞めたい」と思うようなことが起きても乗り越えていけると思いますし、実際にそのようなケースもありました。

辞めたい気持ちの大元と しっかり向き合う

(千葉県・県立 茂原樟陽高校 宮澤勝先生)



長期休暇(春・夏・冬休み)明けは、教員でさえ、「また始まるのか!」といった重い気持ちになるので、生徒が「何か行きたくないなあ」という気持ちになるのは当然であるということから話を始めたいと思います。

学校に限らず、物事は「最初の一步」を踏み

出すのがとても億劫なものです。学校に行くと友人たちと話をしているうちに、「行きたくないなあ」という気持ちは解消していくはずですが、しかしながら、なかには、「なんとなく」ではなく、「明確な理由」が存在するケースもあると思います。

話をしていくうちにわかる、クラス内で人間関係のトラブルがあったとか、昼夜逆転の生活になってそこから抜け出せないとかです。このようなケースでは、根っこにある問題が解決しない限り、学校に対する前向きな姿勢を示すことは難しいかもしれません。スクールカウンセラーの力を借りるなどして、「中立な立場」の人の意見を聞く機会を設けてはどうでしょうか。私も以前同様なケースがあり、保護者と一緒にカウンセラーに相談に乗ってもらったことがありますが、それでも本人と保護者の意思が変わらなかつたので、進路変更の手続きをとりました。その生徒は、通信制の学校に転学しました。環境を変えることで、うまくいくこともあると思います。

夏休み明けに、理由を明かさずに退学していた生徒がいました。数カ月後に「ブラックバイト」が原因だったことを知り、やり切れない気持ちになりました。学校として担任として、何かしてあげられなかったのか?という無力感に襲われました。退学後に偶然、保護者と同じく語り話す機会があり、保護者と関係ができて、自宅に何度か電話をして元生徒が元気に働いていること、昔の級友とも時々会っていることを知り、学校と「繋がっている」ことを、とても嬉しく思いました。